

「守るだけじゃ、もう足りない」——ストーリーカーから守る元SPの幼馴染に24時間密着されて、恐怖ごと身体を塗り替えられています

龍一の指が、まだ触れてもいない肌の上を這うように近づいてくる気配だけで、おまんこがじわりと熱くなった。

嘘だ。触られてもいないのに。

「……力、入ってる」

低い声がすぐ耳のうしろで鳴った。パジャマのうえから肩甲骨のあたりを押さえる掌が大きくて、骨の輪郭ごと包まれる。ストーカーに怯え続けて強張ったままの背中が、彼の体温で一枚ずつ溶かされていく。

「ここ、ずっと固かったろ。限界だったんだな」

返事ができなかった。だってこの手は——ついさっきまで私を「守る」ためだけに存在していた手だ。ドアの施錠を確認し、窓の死角を潰し、人混みで私を壁際に庇った、あの手。

なのに今、その指先がパジャマの裾をめくって、直接、肌に触れている。

「っ……」

鳥肌が腕から首筋まで一気に駆け上がった。

「龍一……っ」

名前を呼んだのは、私のほうだった。

三十分前——リビングのソファで、自分から唇を重ねたのも私。

プロに戻れなくなっていていい。私は、あなたに守られたいんじゃない。あなたに触れてほしい。

あの台詞を口にした瞬間、龍一の中からプロの光が消えた。残っ

たのは、七歳の頃に泣き虫の私の頭を撫でてくれたタツくんと同じ、あの真っ直ぐな瞳。

「――後悔するぞ」

「しない」

「俺は一度手を出したら離さない」

「離さないで」

その四行のやり取りで、十七年ぶんの距離が潰れた。

*

背中に唇が落ちた。

肩甲骨と肩甲骨のあいだ――ストーカー被害で丸くなっていた背中を、龍一の唇が辿っていく。ちゅ、ちゅ、と音を立てて。こんな場所にキスされたことなんてない。脊椎の窪みを舌先がなぞるたびに、腰の奥がきゅうっと疼く。

「……う……っ♡」

声が漏れた。まだ胸にも触れていないのに。

「音、出していい」

耳たぶを食むように龍一が囁いた。低い振動が鼓膜から子宮まで一直線に響く。

「誰にも聞かせない。俺が守ってるから」

(ずるい)

——「守る」って言葉を、こんな使い方しないで。

でもその一言で、声を殺す理由がなくなった。

パジャマのボタンが上から一つずつ外されていく。龍一の指は的確で、もたつかない。SP時代に鍛え上げた手先の正確さが、今は私の身体を剥くために使われている。

最後のボタンが外れて、布が肩から滑り落ちた。ブラはつけていない。寝る前に外してしまっていた。龍一の視線が胸に落ちて——一瞬、指の動きが止まった。

見られている。鎖骨の浮き出た、痩せた胸。ストーカー被害で食が細って、肋骨まで浮いてしまっている。恥ずかしい。こんな身体、見せたくなかった。

腕で隠そうとした。

——その手を、龍一が掴んだ。

「隠すな」

声が低い。怒りが混じっている。でも私にじゃない。私をこんな身体にした全部に向けた怒り。

龍一が鎖骨に唇を落とした。浮き出た骨の線を舐めるように辿り、肋骨の浮いた脇腹に掌を這わせる。壊れ物を扱うような手つきなのに、指先には確かな熱がこもっていた。

「……綺麗だ」

嘘だと思った。こんな身体のどこが。

「綺麗じゃ——」

「俺が綺麗だって言ってる」

遮られた。有無を言わせない声で。掌が胸の膨らみに触れて、やわく包み込まれる。乳首に指先がかすって、肩がびくりと跳ねた。

「ひ……っ♡」

「感じてるのに固くするな。怖くない」

(バレてる)

そう——怖かった。ストーカー被害に遭ってから、誰かに触れられることそのものが怖くなっていた。自覚すらなかったのに、龍一は私より先にそれを見抜いていた。

親指の腹が乳首の先をぶにりと押し潰す。じわっと広がる甘い痺れに、背中がソファに沈んだ。

「あ……っ♡ んっ……♡」

固くなっていく乳首を、指先でくるくると弄ばれる。圧してはズラし、ズラしては摘む。焦れたいくらいゆっくりで、でもその遅さが快感を全身に染み込ませていく。

「この先が固くなるの、お前の身体が俺を求めている証拠だ」

言いながら人差し指と中指で乳首を挟み、ぐに♡ぐに♡と捏ねられた。

「あっ……♡♡ やだ……声……っ♡」

「出せって言っただろ」

挟んだまま引っ張られる。乳首の根元がつうん♡と痛んで、でもその痛みの底に甘い快感がとろりと沁みて——声を囁み殺せなくなった。

「んう……♡♡ ……っひ♡ 乳首……だめ……っ♡♡」

（この人の手。私を守ってきた手。その手が今、乳首を弄んでる。同じ手なのに全然違う。熱くて、指の腹が硬くて、分厚い——この手で触られてるって思うだけで、おまんこがどんどん濡れていく）

龍一の口が首筋に落ちた。鎖骨の窪みを舐め上げて、そのまま胸元へ降りてくる。舌先が乳首に触れた瞬間、背中が弓なりに反った。

「あゝっ……♡♡」

吸われた。ちゅう♡と音を立てて、先端だけを唇で挟まれて、ちろちろと舌先でいじめられる。反対の胸は掌で揉まれていた。的確な手。——私の身体の全部を把握しようとする手。

「こっちのほうを感じるのか」

右の乳首を吸いながら、左の乳首を指先でカリ♡カリ♡引っ掻かれた。

「ひあっ♡♡ あ、あ……っ♡♡ 両方……っ、同時にされたら……っ♡♡♡」

頭がぼんやりしてきた。乳首を舐められるだけでこんなに蕩けるなんて知らなかった。太腿の内側を愛液が伝い落ちていくのが分かる。パジャマのズボンの生地がもうぐっしより濡れている。

——その時、龍一の唇が離れた。

急に冷たい空気が濡れた乳首に当たって、ひやりとする。

「え……」

「顔見せろ」

顎を掴まれて、上を向かされた。龍一の目がすぐ近くにある。

「……泣いてんのか」

気づかなかった。自分が泣いていたことに。頬を伝った涙が、龍一の親指で拭われる。

「怖いか」

「……ちがう」

違う。怖くない。怖くないのに涙が出る。この人の手が優しくて、この人だけが私の全部を見ようとしてくれていて——それが嬉しすぎて泣いている。

「嬉しいの……あなたが触ってくれるのが……」

龍一の指が止まった。長い沈黙。呼吸の音だけが聞こえる。

「……続けるぞ」

声が、さっきより低くなっていた。

「脱がすぞ」

ズボンの腰に指をかけられる。下着ごと、一息に引き下ろされた。太腿を伝い落ちていた愛液が空気に触れて、ひやりとした。

「っ……見ないで……」

「無理だ」

低い声にはもう、プロの冷静さなんて欠片もなかった。

龍一の手が太腿の内側を辿る。大丈夫、と自分に言い聞かせた。
この人だから大丈夫。——でも太腿の筋肉が勝手に強張って、膝が
閉じそうになる。

「待って——」

「待たない」

閉じかけた膝を掌で押し開かれた。

「ここ、ずっと強張ってた。誰にも触らせなかったんだろ」

（なんで分かるの）

凶星だった。ストーカー被害以降、自分の身体に触れることすら
避けていた。お風呂でも必要最低限しか洗わない。まして誰かに開
かせるなんて——。

涙が零れた。怖いからじゃない。見抜かれたから。この人は私の
全部を読んでしまう。

龍一の指がおまんこに触れた。

「……っ♡♡♡」

ぬるりと——指先が割れ目を滑った。

くちゅ♡

濡れた音がリビングに響いた。恥ずかしくて耳を塞ぎたい。こん
なに溢れてるのがバレてしまう。

「こんなに濡れてるのに、まだ怖いか」

「……怖くない……っ♡♡ あなただから……怖くない……」

その言葉に応えるように、龍一の指が深くなった。割れ目に沿って上下にゆっくり撫でられて、クリトリスの包皮をくるんと剥かれる。

「っあ♡♡ やっ……そこ、直接……っ♡♡♡」

「ここが気持ちいいの、自分でも知らなかっただろ」

（知らなかった。自分の身体なのに。この人に教えられてる）

指先がクリトリスの頂点をくにゅ♡くにゅ♡と揉みしだいた。包皮の内側に隠れていた芯がむき出しにされて、直接ぐりぐり♡♡と圧される。

「やっ♡♡ んっ、んゝ んゝ っ♡♡♡ そこっ……ダメ……っ♡♡♡」

腰がぴくんと跳ねた。逃げようとしたのに、龍一の空いた手が腰骨を押さえて動けない。

「逃がさない」

（ずるい。その台詞。ボディガードみたいに言うくせに、やってることは全然違う）

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

クリトリスを弄る指が愛液を絡めとって、ぬるぬると滑る。快感が下腹から腰の奥に広がっていく。自分の身体がこんなに敏感だなんて知らなかった。

「指、入れるぞ」

返事を待たず、中指がおまんこの入り口に宛がわれた。ぬぷ♡と先端が沈む。

「っ——♡♡♡」

ゆっくりと、でも迷いなく、根元まで指が滑り込んだ。

ぬる♡

おまんこの中を指が押し広げていく感触が、静かなリビングに水音として響く。

「あ♡♡ ん、あっ♡♡ 奥……指が……っ♡♡♡」

「中もぐしょぐしょだな。ここ、ずっと空っぽだったんだろ」

凶星だった。何年も誰にも触れさせていない。自分でも触れたくなかった。なのにこの人の指一本で、おまんこが嬉しそうにきゅうっ♡♡と締まる。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

指が中でゆっくり動き始めた。奥を押して、手前に引いて、指の腹で前の壁をなぞる。

「ひあゝっ♡♡♡ そこ……っ、そこ当たって……っ♡♡♡」

「ここか。覚えた」

覚えた——その一言に涙がまた溢れた。この人は私の身体を全部知ろうとしている。どこが気持ちいいか、どこで声が漏れるか、どの角度で目が潤むか。プロの観察力が、今は全て私の快樂のために

注がれている。

指がもう一本増えた。二本の指でおまんこの壁を押し広げられて、ぐちゅぐちゅ♡♡と掻き回される。

「あゝ あゝ っ♡♡♡ やゝ……二本……っ♡♡ 中かき回さないで……っ♡♡♡」

「かき回してるんじゃない。お前の身体を読んでる」

（読まれてる。おまんこの中まで全部、この人に解析されてる。それが死ぬほど恥ずかしいのに——信じられないくらい気持ちいい）

クリトリスを親指でぐり♡ぐり♡押し潰しながら、中では二本の指がぐちゅんぐちゅん♡♡とピストンを繰り返す。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

おまんこから溢れた愛液が太腿を伝って、ソファのレザーに垂れていく。水音がやまない。部屋中に私の卑猥な音が響いている。

「あ♡あ♡あ♡あ♡♡ んう♡♡ 龍一……っ♡♡ もう……っ、おかしくなる……♡♡♡」

「まだだ。もっと溶かす」

指が奥の壁をぐりっ♡♡と擦り上げた。

「ひあゝ っ♡♡♡♡」

視界がチカチカした。知らない場所を触られた。自分の中にこんなところがあったなんて。

「ここ、自分じゃ触ったことないだろ」

「ない……っ♡♡♡♡　ない……のに……っ♡♡♡♡　なんで……
っ、あなたが……知って……っ♡♡♡♡」

「お前の身体が教えてくれる」

その場所を集中的にぐりぐりぐり♡♡♡と擦られた。快感が一気に腹の底から突き上がってくる。膝が震えて、視界がぼやける。

「やゝ……っ♡♡♡♡　やゝっ♡♡♡　イ……っ、何か来る……っ♡♡♡♡」

「来い。全部受け止める」

ぐちゅん♡♡♡

「あゝ　あゝ　あゝ　あゝ　っっ♡♡♡♡」

指で掻き上げられた瞬間、頭の中が真っ白に弾けた。おまんこが龍一の指をぎゅうぎゅう♡♡♡と締め上げて、愛液がどっと溢れ出す。腰がびくんびくんと痙攣して、止まらない。

「は……♡♡♡　はっ……♡♡♡　は……ひ……♡♡♡♡」

肩で息をしながら目を開けると、龍一が私を見下ろしていた。その目に、もうプロの色はない。

「……ベッドに行くぞ」

抱き上げられた。ソファから寝室まで、裸のまま運ばれる。龍一の腕に包まれて——石鹸の匂いが鼻先をかすめた。

(この匂い)

十七年前と同じ。泣いている私の頭を撫でてくれた、タツくんの手の匂い。同じ石鹸を、この人はまだ使っている。大人になっても